

光源氏の教育観にみる栄華への注視

—白居易の諷諭詩との関連から—

三浦佳子

一、はじめに

『源氏物語』において、かの有名な「桐壺」巻の「長恨歌」引用に始まる漢籍の引用が、作品創作の上で何らかの意図を持ってなされたことは、古くから指摘がなされているところである。しかし、その引用の程度は実に多様で、『源氏物語』中の漢籍引用の様相は、凡そ一つの定義によって明らかにできるようなものではないだろう。

一口に漢籍引用といっても、その引用の様相は実に多様である。このことは、今日まで読み継がれる『源氏物語』という作品の筆の雄弁さからして至極当然であるともいえる。物語作者のその筆運びの一端として漢籍引用を捉えていこうと思うが、本論の性質上、今回は『源氏物語』の作者が漢籍引用をどのような手法で行い、そこに何を込めようとしたのか。そこにも物語作者の意識が介在し、より表面化することがないか。物語作者の内面的な意識の投影を漢籍引用から見出すことを目指す。

本稿では、数ある『源氏物語』中の漢籍引用の中でも、作中引用頻度の最も多い「長恨歌」を収めた、白居易の『白氏文集』の

漢詩を中心に『源氏物語』の漢籍引用を見ていきたい。

二、『源氏物語』の漢籍引用

『源氏物語』の漢詩文引用のうち、「長恨歌」引用は作中で「桐壺」「帚木」「若紫」「紅葉賀」「葵」等の以下十八巻にわたって行われている。「長恨歌」の引用を見ると、「長恨歌」を想起させることで人物の造形を行ったり、場面情景をより広く思い浮かべせたりといった、物語ならではの定型化された引用が見られる（注1）。加えて、その「長恨歌」を収めた『白氏文集』は、漢籍作品の引用としても、『源氏物語』の中で用句数、頻度数ともに五十パーセントを上回る圧倒的多数を占めている（注2）。この事実に再び目を向けるとともに、藤原克己氏の『源氏物語』における白居易の漢詩引用についての指摘に注目したい（注3）。

五言古詩で抒情的佳句にも乏しく、内容も硬質で、一般には敬遠されていたとおぼしい『文集』巻一・二の諷諭詩からも、巻一の「凶宅」（0004）や、巻二の連作「秦中吟」から「讒婚」

(0075) 「重賦」(0076) 「傷宅」(0077) 「不致仕」(0079) などが引用されていることは、同時代の白詩受容の一般的な傾向に照らして、きわめて特異なことと言わなければならないのである。

(※) ここで指摘されているように、『源氏物語』における『白氏文集』の引用は、当時の平安貴族に好まれた白居易の詩の傾向とは異なり、卷一、二の諷諭詩からのものが多いという。とくに、「讒婚」「重賦」「傷宅」「不致仕」などは、「新楽府」と呼ばれる、当時の中国の歴史的状况を踏まえて書かれた長詩である。これは彼が左拾遺を拜命して以来折々に詠んだ作品の中でも、その時々における諸問題を、時に直接的に、時に巧妙な比喻を用いて詠んだ「諷諭詩」と称せられるものである。白居易の「諷諭詩」は、その詩の中に何らかの時事的な批判が込められ、創作されるという特徴を持っている(注4)。「諷諭詩」という作品群に属する作品の中でも、藤原克己氏が指摘するような抒情性に乏しい作品を引用する点で、同時代の白詩引用において特異な引用の仕方をしているということは、『源氏物語』の『白氏文集』引用の上で意識しておかなければならないだろう。

このような問題を踏襲した上で『源氏物語』の『白氏文集』引用について考えていくが、右記に挙げた指摘を有効化するためには、藤原克己氏の指摘の中にある「同時代の白詩受容の一般的な傾向」とされる内実を知っておくべきであろう。勿論、ここで述べるのが果たして当時の白詩受容を正確に把握した事情とは甚だ断言し難いが、おおよそこのような受容の仕方が多かったであろうという見のもとに考えていきたい。

『白氏文集』は早くに日本へと伝来するのだが、実際にそれが受容されたのは、当時流行していた『和漢朗詠集』などに代表されるような、摘句すなわち漢詩の一部を切り取って鑑賞するようなものによってであるとされる(注5)。白居易は生存中早くから人気があつて、大江千里の『句題和歌』にも白居易の詩句を題とする詩が多く収められ、『枕草子』一九八段「文は文集」(注6)と清少納言が文集Ⅱ白氏文集と記したのは白居易の死後百五十年ほどのことで、白詩の流行は『源氏物語』成立時期にも当然のごとく引き継がれていたということは、あえて言うまでもない事実だろう。

ここで、当時の漢文学の受容は摘句によつてであることが多いとしたが、『源氏物語』作者以外は、いったいどのように漢籍を受容していたのだろうか。『源氏物語』成立当時の漢籍の引用を、具体的に見ていこう。

「香烽峰の雪」という、白居易の漢詩の典故を踏まえた章段が有名な『枕草子』についてみると、その漢籍引用は、ほとんどが『和漢朗詠集』に収録されるような、比較的流行していた佳句からのものであったという(注5)。「和漢朗詠集」の成立時期の問題などから語幣を招くかもしれないため、さらに詳述するならば、『和漢朗詠集』が当時流行していた秀句を集めて編纂されたという事情や、同じような秀句選は様々にあつたと考えられることから、『枕草子』作者もそういった類の書物で漢詩に親しんでいたと推測することができることだろう。

さらに、このような推測を助ける紫式部の見解がある。紫式部は自身の日記で清少納言の漢籍引用について辛辣に述べている。以下は、『紫式部日記』の一節である。

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほど、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずるなるをりも、ものおはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまになるにはべるべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ。

『紫式部日記』二〇二頁（注7）

これは、紫式部の才女批評の中にある文章で、傍線部では「真名書きちらしてはべるほど、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」、『紫式部日記』と、清少納言は漢字を書き散らしているけれども、よく見たら、その学識の程度が足りない点ばかりだと批評している。紫式部が言う清少納言の学識の不足している点とは、漢籍を本文で読んだり、その内容を深く理解したりといった取り込み方ではなく、先に述べた摘句によって漢文学に親しむような態度を指しているのかもしれない。

それでは、当時の白詩の受容とは異なった性質を持つ『源氏物語』作者は、どのように漢文学に親しみ、それを使用したのだろうか。物語を通じてその姿勢を明らかにしていきたい。

三、光源氏の教育観と栄華心酔の否定

「少女」巻で、光源氏が息子夕霧の元服について準備をする場

面が描かれる。右大将をはじめとして、夕霧の伯父にあたる人々は皆立派な者ばかりで、世間でも大層評判になっていた。そんな中、光源氏が息子の処遇に対して、世間一般で想像された処遇とは異なった方針を明らかにする。以下にその本文を引用する。

四位になしてんと思し、世人もさぞあらんと思へるを、まだいときびはなるほどを、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりなからんもなかなか目馴れたることなりと思しとどめつ。

「少女」③二〇頁

傍線部は世間が想像した、特別に処置しなければそうなっていたであろう処遇である。つまり、夕霧を元服時に四位に任ずることである。新全集頭注では、「夕霧は二世の源氏だが、父の権勢により親王の子に准じて四位にすることはできる」とされている。そして、二重傍線部が光源氏の考えによつて変更された処遇である。光源氏は、いくら自分の思い通りになる世の中であるからといって、いきなりそうした位を与えたりすることはかえってありきたりなので止めた、と夕霧を四位にしないという決定をくだす。ここで注目したいのは、光源氏がその心中で、栄華の中に心酔して思いのままに権勢をかさにきるようなことを、否定的に語っているという点である。この考えのもとに、光源氏は夕霧に六位の位を授け、大学寮に入れることを決める。この処遇に不満を持った祖母の大宮に光源氏がさらに詳しく、処遇の意図について語った言葉がある。以下にその本文を引用したい。

A

「ただいま、かうあながちにしも、まだきにおひつかすまじうはべれど、思ふやうはべりて、大学の道にしばし習はさむの本意はべるにより、いま二三年をいたづらの年に思ひなして、おのづから朝廷にも仕うまつりぬべきほどにならば、いま人ととなりはべりなむ。

「少女」③二一頁

光源氏は、「大学の道にしばし習はさむ」と、学問に専心する大学という場で教育を受けさせようとするのである。大学教育を受けることで、自然と朝廷に仕える頃には「いま人」、すなわち一人前になっているだろうと言う。続いて自身の受けた教育について述べる。

B

みづからは、九重の内に生ひ出ではべりて、世の中のありさまも知りはべらず、夜昼御前にさぶらひて、わづかになむ、はかなき書なども習ひはべりし。ただ、かしこき御手より伝へはべりしだに、何ごとも広き心を知らぬほどは、文の才をまねぶにも、琴笛の調べにも、音たへず及ばぬところの多くなむはべりける。

「少女」③二一頁

光源氏は謙遜混じりで父桐壺帝から受けた教育について語る。宮中で育つて、世間知らずに、刻苦精勵を体験しないままであったため、詩を作ることに素養の不足を感じ、音楽をするのにも

音足らずな気持ちを痛感した、と述べる。この言葉は、光源氏が一世源氏として当時の皇子教育の通例に従い、学問だけに専心するのではなく、教養の一つとして学び、それに加えて諸芸を一通り習得する教育を受けたことを示している。この教育を受けた自身は何をするにも至らない思いをしたというのは、光源氏ほどの才能を持った人物だから言葉通りに受け取るわけにはいかないが、謙辞混じりにその教育では足りない部分があることを仄めかしている。

さらに、夕霧に対して自分が受けたような教育では足りないと思うことについては、夕霧が二世源氏であることも無関係ではないだろう。そんな光源氏が自分が受けた教育とは違うAのような教育を夕霧に施すということに、どのような意図が隠されているのか。そのことがCに示される。

C

はかなき親に、かしこき子のまさる例は、いと難きことになむはべれば、まして次々伝はりつつ、隔たりゆかむほどの行く先、いとうしろめたなきによりなむ、思ひたまへおきてはべる。高き家の子として、官爵心にかなひ、世の中さかりにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。戯れ遊びを好みて、心のままなる官爵にのぼりぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ、追従し、気色とりつつ従ふほどは、おのづから人とおぼえてやむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおかれて、世おとろふる末には、人に軽め侮らるるに、かかりどころなきことになむはべる。なほ、才をもととしてこ

そ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。さし当たりでは心もとなきやうにはべれども、つひの世の重しとなるべき心おきてをならひなば、はべらすなりなむ後もうしろやすかるべきによりなむ。ただ今ははかばかしからずながらも、かくてはぐくみはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひ侮る人もよもはべらじと思うたまふる

「少女」③二一頁

〔C〕の傍線部で、光源氏は大宮に説明するために、親子にはじめる子孫繁栄について語り、「はかなき親に、かしこき子のまさる例は、いと難きことになむはべれば、まして次々伝はりつつ、隔たりゆかむほどの行く先、いとうしろめたなきによりなむ」とつまらない親に子が優るといふことは自然に任せておいてあり得ることではないであろうし、まして孫以下の代になったなら、どうなることかと不安に思われてならない、と子孫の繁栄を危惧する思いを語っていく。そして、自分の権勢下にある今の御代だからこそ、家の繁栄を維持するための考えを次に述べる。「時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ追従し、気色とりつつ従ふほどは、おのづから人とおぼえてやむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおかれて、世おとろふる末には、人に軽め侮らるるに、かかりどころなきことになむはべる。」と、家に権勢のある間は、学問や高い教養を備えていなくても、周りの人々は機嫌をそこねまいとしてくれるが、家の権力が失墜したり、保護者と死に別れたりした際には、人から軽蔑されても何の力も持ち合わせていないため、惨めな者になってしまふだろう、と述べ、権勢に溺れる者に対する感慨や、権勢が移り変わると人の態度も変わって

しまふことへの注意深いまなざしを語るのであった。

そこで、そうならないために、光源氏は波線部のような「才」を基とした「大和魂」を持った者が国の中核を担う要人となることで国を保ち、一族の子孫繁栄につながるといった見解を導きだしている。

このように、この場面で光源氏は、教育面において自身が受けた教育を否定し、夕霧に対しては、大学で学問を身につけることを願うのである。

さらに、〔C〕の傍線部からは、教育観だけでなく、権勢下にいる者に対する光源氏の考えも汲み取ることができそうである。栄華の中に身を置き、家の権勢に心酔し振る舞うことへの危惧を光源氏が持ち、栄華と栄華に付随する陥りやすい危険に対する先見のまなざしをも持っていた。そのまなざしによって引き出された見解が、夕霧に対する教育観にも通じていくように思われる。

このような考えを光源氏はいったどのようなプロセスを経ることによって獲得したのだろうか。この考えの背景として、光源氏が須磨流謫の際に経験したことが、深く根をはっているように思われる。光源氏は、須磨流謫の前後において、所詮、世の人々はその時権勢のあるものに追従するだけであるという己の中の真実を見つけ出したと考えられる。それを示す叙述を次に引用する。

除目のころなど、院の御時をばさらにも言はず、年ごろ劣るけぢめなくて、御門のわたり、所なく立ちこみたりし馬、車うすらぎて、宿直物の袋をさをさ見えず。親しき家司どもばかり、ことに急ぐことなげにてあるを見たまふにも、今よりはかくこそはと思ひやられて、ものすさまじくなむ。

「賢木」巻では、桐壺院が崩御し、その支柱を失った光源氏と藤壺の戸惑いと悲しみ、新しい政権である右大臣・弘徽殿女御方への政治的実権の交代の様が描かれている。右記の引用は、光源氏が昔（桐壺院が健在していた頃）とうって変わって、活気を失いひっそりとしている様子を描いており、傍線部のように今からはこのようになっていくのだろう、ともの悲しく思われると語られている。このように権勢を失ったものから人々が離れていく経験を、光源氏は身を以て知る。ところが、光源氏が赦免され、帰京を許されると、人々は、

我もいかで人より先に深き心ざしを御覽せられんとのみ思ひ
 きほふ男女につけて、高きをも下れるをも、人の心ばへを見
 たまふに、あはれに思し知ることさまさまなり。

「蓬生」②三三四頁

と、男女、身分の上下なく人々が自分の元へこぞって集まる様子を見て、傍線部のように不遇の時期に自分に背を向けた世間を思い出し、人間の本性をそこに見つめることになる。

藤原克己氏は、この場面を中国文学と照らし合わせ、李蕭遠の「運命論」や劉孝標の「広絶交論」に見られる権勢の盛衰について阿付し離反する人情の浮薄を言う「交道難」の主題が、須磨流謫前後の物語の随所に描きこまれていて、「なほ才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強う侍らめ」（「少女」③二二頁）という光源氏の言葉も、「そのような須磨流寓前後の彼自身

の経験と世態観察にしたたかに裏打ちされた発言として理解されねばならないのである」と指摘している（注8）。以上から、光源氏の栄華に溺れることへの批判は、自身の実体験に基づく教訓であることがわかる。

このように「少女」巻で光源氏が語る夕霧に対する教育の中には、自らの体験をして学び取った栄華へのまなざしが深く関わっている。この物語の絶対的な主人公である光源氏がこのまなざしを持つことは、非常に大きな意味を持つといえるだろう。他でもない『源氏物語』の物語における絶対的な中心人物、光源氏の考えは、当然先に確認した通り、権勢を手中に収めた存在として物語の中にある「世」を変える力を持つ。そんな力を持つ人物が持つ考えは、そのまま物語全体の中心となり、物語の「世」を変えていくような考えになる可能性を孕んでいるからだ。物語の「世」を変えていく可能性を孕む考えというのは、そのような物語世界を構築しようとする論議の意識に、極めて近いところにあるといえるのではないだろうか。この栄華に対するまなざしというのは、そのまま『源氏物語』の作者が思うところの「世」を実現するまなざしではなからうか。

物語の栄華に関しては、中西進氏が「桐壺」巻での「長恨歌」引用について非常に興味深い指摘をしている（注9）。桐壺帝が桐壺更衣を寵愛する様を「長恨歌」をかりて描写したことを指摘し、読者の注意を「長恨歌」に向けさせた作者が、着実に「長恨歌」に依拠しながら更衣の運命を語っておいて、読者が想起した「長恨歌」とは違う筋の物語展開をも「源氏物語」は仕掛けているのだ。ここから中西氏の言葉をそのまま引用する。

白詩が、

姉妹弟兄皆列士

姉妹弟兄 皆 士に列し

可憐光彩生門戸

憐むべし 光彩 門戸に生ず

といつて一門の繁栄を口にするところは、『源氏物語』に見当らない。『源氏物語』は作り物語なのだから、そのような筋の構想も自由だったはずで、「楊貴妃のためし」といわれた読者は、ただちに一門の繁栄を想像したかもしれない。(中略)

しかし、その想像をうら切って更衣ははかなく世を去る。周辺に頭ち現われてくる縁者の男性もいない。となると、よけい楊貴妃の華やぎとは対比的で、更衣のあわれは引立つてあろう。

一門の繁栄を切断することは、栄華への一つの批判だったかもしれない。のちの「凶宅の詩」(0004)などで栄華への批判を白詩がもつことは明らかであり、「凶宅の詩」からの文脈は『源氏物語』にも取入れられている(「夕顔」「蓬生」)。逆説的引用とでもよびうるものが、繁栄の切り捨てであつたらうか。

このように中西氏が栄華への批判精神を白詩の逆説的引用といつたことは、『源氏物語』の漢籍引用の多様な様相の一端を解き明かすための、誠に有益な指摘であるといえよう。「少女」巻で光源氏が語った栄華に対するまなざしが、中西氏の指摘した白詩の栄華批判に関わるとすると、それは、物語作者の諷諭詩の熟読に端を発すると考えられる。

これに関連して、丸山キヨ子氏が諷諭詩の影響による物語人物

の人物造型について論じていることも想起される。丸山氏は、諷諭詩の熟読の影響が人物造型のための一種の養いになっている可能性を示唆し、次のように論じている(注10)。

私は、源氏物語の人物の理想像が、儒教的論理性からのみ導き出されているものとは思わないので、すべてを、諷諭詩の掲げる理想性に帰することはしたくないのであるが、しかし、物語の中枢をなす人物が、すべて社会の上層にある者として、他の人々への慮り、特に下の人々への配慮が注意深く指摘されて、徳とされているところには、諷諭の詩の理想性をとりこんでいるものと思わずにはいられないのである。

最後の一文に述べるように、白居易の諷諭詩に精通した故に『源氏物語』作者が「諷諭の詩の理想性」を深く理解し、物語に「とりこんでいるものと思わずにはいられない」とする丸山氏の考えに首肯したい。先学の研究の中には本稿で挙げた「少女」巻と白詩の「凶宅の詩」の関連を言うものはないが、「少女」巻で語った光源氏の栄華へのまなざしは、白詩の「凶宅の詩」の影響を少なからず受け継ぐものと見ることも可能ではないだろうか。

それでは、「凶宅の詩」の内容を見ることでこれらの可能性を検証したい。以下に、白詩の「凶宅の詩」(注11)を引用する。便宜上、形式番号を付す。

凶宅詩

1 長安多大宅

長安に大宅多し

2 列在街西東

列つて街に西東に在り

- 3 往往朱門内
 4 房廊相對空
 5 鼻鳴松桂枝
 6 狐藏蘭菊叢
 7 蒼苔黃葉地
 8 日暮多旋風
 9 前主為將相
 10 得罪鼠巴庸
 11 後酒為公卿
 12 寢疾歿其中
 13 連延四五主
 14 殃禍繼相鐘
 15 自從十年來
 16 不利主人翁
 17 風雨壞簷隙
 18 蛇鼠穿牆墻
 19 人疑不敢買
 20 日毀土木功
 21 嗟嗟俗人心
 22 甚矣其愚蒙
 23 但恐災將至
 24 不思禍所從
 25 我今題此詩
 26 欲悟迷者胸
 27 凡為大官人
 28 年祿多高崇
- 往往朱門の内
 房廊相對ひて空し
 鼻は松桂の枝に鳴き
 狐は蘭菊の叢に藏る
 蒼苔黄葉の地
 日暮れて旋風多し
 前主は將相為れども
 罪を得て巴庸に鼠たる
 後主は公卿為れども
 疾ひに寝ねて其の中に歿す
 連延として四五の主
 殃禍繼いで相鐘る
 十年より來
 主人翁に利あらず
 風雨簷隙を壞り
 蛇鼠を牆墻穿つ
 人疑つて敢へて買はず
 日に土木の功を毀る
 嗟嗟俗人の心
 甚しいかな其の愚蒙なる
 但災の將に至らんとするを恐れて
 禍のよる所を思はず
 我今此の詩を題して
 迷者の胸を悟らしめんと欲す
 凡そ大官と為る人
 年祿多くは高く崇し

- 29 權重持難久
 30 位高勢易窮
 31 驕者物之盈
 32 老者數之終
 33 四者如寇盜
 34 日夜來相攻
 35 假使居吉土
 36 孰能保其躬
 37 因小以明大
 38 借家可論邦
 39 周秦宅嶠函
 40 其宅非同
 41 一輿八百年
 42 一死望夷宮
 43 寄語家与国
 44 人凶非宅凶
- 權重くして持つこと久しくし難し
 位高くして勢ひ窮まり易し
 驕るは物の盈なり
 老いは數の終りなり
 四者寇盜の如く
 日夜來りて相攻む
 假使吉土に居るとも
 孰か能く其の躬を保たむ
 小に因つて以て大を明らかにし
 家を借りて邦に論ふべし
 周秦嶠函に宅り
 其の宅同じからざるにあらず
 一は輿りて八百年
 一は望夷宮に死す
 語を寄す家と国と
 人凶にして宅凶なるにあらず

この詩は、大邸宅を題材とした諷諭詩である。この詩の主題は、不吉な事件を家のせいにする人間の身勝手さに対する批判である。第二十七句から第三十一句にかけて權勢をほしいままにした權力者の没落のしやすさを述べ、大宅（豪邸）という權力を維持することの難さを詠っている。主にこの詩は、「夕顔」巻の「なにがしの院」の荒れ果てた薄気味悪い風景描写に用いられるといった『紫明抄』の指摘などで知られるところである。しかしここでは今一步進み、『紫明抄』の指摘と合わせ、「帚木」巻のかの有名な雨夜の品定めにおける中流下流の女性論議までもを視野に入れてみよ

う。新聞一美氏の言葉を借りるならば「大邸宅を貴重視しないという精神は、光源氏が夕顔の宿に入つて行くためには前提となるものであ」（注12）るが、それは当然「夕顔」巻のみならず「帚木」三帖の発端ともいふべき「帚木」巻の延長線上にある。だとすれば、「凶宅の詩」の精神は一つ一つの場面構成に底流しているのみならず、長編としての『源氏物語』の構想に関わるものであるともいえないだろうか。

「凶宅の詩」は一つの場面構成に留まらず、より広い射程を持つ一つの思想として、『源氏物語』を貫く可能性を持つといえる。このように考えると、本稿で注目してきた「少女」巻もやはり、直接的な引用とはいえずとも背景に「凶宅の詩」の思想を隠し持っているはずである。権勢を持つ者の栄華の維持の難さを解くという点で、この「凶宅の詩」の白居易の見解は、「少女」巻に見た光源氏のそれと類似しているのである。

「凶宅の詩」でさらに注目したいのは、第四十四句「人凶非宅凶（人凶にして宅凶なるにあらず）」の一節である。大宅をめぐる起こった不吉な事件は、家に問題があつたのではなく、それを取り巻く人間たちによって引き起こされたのだという主張である。このことから、権勢を失う者は、物や時世、権勢などの周りを取り巻くものに頼るだけであることを暗に批判し、全ての実は人にあるとする白居易の見解が提示されていると見ることが出来る。ここでいう実とは、実害や没落の原因を指すと考えられ、没落の原因は人の内にある何ものかに起因していることを示している。

先に引用した「少女」巻の夕霧に対する光源氏の教育観は、須磨流謫前後の実体験に端を発したものであると述べたが、そこから編み出した教育方針は、光源氏の考えとして物語の中で作用す

ることになる。その考えは大学で学ぶことであり、それによって、「なほ才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強う侍らめ。さし当たりては心もとなきやうにはべれども、つひの世の重しとなるべき心おきてを馴らひなば、はべらずなりなむ後もうしろやすかるべきによりなむ」（「少女」③二二頁）と、「才」という実を持ち、「大和魂」を持つことで国の中樞を担うべく理想の人物になるとしている。「才」とは、漢学の知識であるとされる（注13）。白詩を読み、そのメッセージから紫式部が構築した見解を、ここで示していると考えることはできないだろうか。このように「凶宅の詩」で詠まれた、栄華の維持の難さが人の内にあるものに起因するという思想を意識化し、物語にとり込み、その繁栄のために必要な人の素養を編み出しているといえないか。それが、「才」（漢才）という素養であり、それを持つ人物が物語で繁栄するということ、物語の呼応が見出せるのではないだろうか。

四、漢才の尊重と大和魂

光源氏が夕霧に対する教育観で示した漢才の重要性について語る場面は、「少女」の巻の他の叙述にも見られる。

事果ててまかづる博士、才人ども召して、またまた文作らせ給ふ。上達部、殿上人も、さるべきかぎりをば、皆とどめさぶらはせさせたまふ。博士の人々は四韻、ただの人は、大臣をはじめたてまつりて、絶句作りたまふ。興ある題の文字選りて、文章博士奉る。短きころの夜なれば、明け果ててぞ講ずる。左中弁講師仕うまつる。容貌いときよげなる人の、声

づかひものものしく神さびて読みあげたるほど、いとおもしろし。

「少女」③二六頁

この場面では、夕霧の大学入学の儀式の後、光源氏が邸宅に博士や才人を招いて作文の会を開催している。嫡男夕霧の将来を頼むことが、この会開催の意図であることは間違いない。しかし、そういった親心からの動機であっても、光源氏が漢才に通じた博士、才人を尊重する姿勢であったことは疑う余地がないだろう。そして、このような光源氏の漢才尊重の姿勢は、物語世界に大きな変化をもたらすことになる。

まず、その変化が起こる前の物語世界を確認したい。

めづらしくいぶかしきことにして、我も我もと集ひ参りたまへり。博士どももなかなか臆しぬべし。「憚るところなく、例あらむにまかせて、なだむることなく、きびしう行へ」と仰せたまへば、しひてつれなく思ひなして、家より外にもとめたる装束どもの、うちあはずかたくなしき姿などをも恥なく、面もち、声づかひ、むべむべしくもてなしつつ、座につき並びたる作法よりはじめ、見も知らぬさまどもなり。若き君達は、えたへずほほ笑まれぬ。さるはもの笑ひなどすまじく、過ぐしつつ、しづまれるかぎりをと選り出だして、瓶子なども取らせたまへるに、筋異なりけるまじらひにて、右大将、民部卿などの、おほなおほな土器とりたまへるを、あさましく咎め出てつつおろす。「おほし垣下あるじ、はなはだ非常にはべりたうぶ。かくばかりのしるしとあるなにしを知らず

してや朝廷には仕うまつりたうぶ。はなはだをこなり」など言ふに、人々みなほころびて笑ひぬれば、また、「鳴り高し。鳴りやまむ。はなはだ非常なり。座を退きて立ちたうびなん」など、おどし言ふもいとをかし。

「少女」③二三頁

これは「少女」巻の、源氏邸で夕霧の大学寮入寮に際して、字をつける儀式の場面である。上流貴族の子息の大学寮入寮というもの珍しいイベントを見るために、われもわれも他の貴族たちが参列しに来る。源氏が儀式を執り行う大学寮の博士に「憚るところなく、例あらむにまかせて、なだむることなく、きびしう行へ」と言ったものの、後に続く儀式の描写はその言葉とは対照的なものとして描かれている。儀式を執り行う博士の装束は、他人から借りている装束の数々を取り合わせた風で身につかず不恰好であり、その様子を捉えて、まず、博士の外見を説明し、続いて、博士がそれを恥ともしていない様子で、そのまま儀式を進行していく姿を戲画的に描いている。その姿を見た若い君達は、博士たちの滑稽さに堪えられず笑ってしまう。さらに、こうした儀式に慣れていない儀式参列者である貴族たちを注意する博士を見て、その場にいる貴族たちも笑い出し、それをまた博士が注意し、儀式が厳肅なムードでは進行していかない様子を語っている。一貫して博士をもの笑いの種とし、儀式の様子を戲画的に描いていく。このように夕霧の大学入学の儀式の時点においては、大学寮の博士は多くの貴族にとつて尊重するものというより、自分たちより格下の者であるかのように扱われているのである。これは、そのまま当時の大学寮の状況を投影している。

つまり、夕霧大学入学以前または入学直後までの物語世界で、衰退傾向にあった大学寮の状況を示しているのである。そして、学問（漢才）を極めた者である博士たちの不遇をも語っている。夕霧大学入学以前の博士の不遇について描かれる場面がいくつかある。右記に挙げた引用にあるような博士の服装に関して、みすばらしい様子を「花宴」巻（①三五四頁）では「年老いたる博士どもの、なりあやしくやつれて」と語り、その不遇について「賢木」巻で「またいたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて」（「賢木」巻②一四〇頁）と、右大臣方の権勢下の時流にのらない博士たちの様子を語る。そこには、漢才ある者が日の目を見ない世界が描かれているといえる。

そして、光源氏による夕霧大学入学を契機に物語には大きな変化がもたらされることになる。その変化がわかる本文を次に引用する。

昔おぼえて大学の榮ゆるころなれば、上中下の人、我も我も
とこの道に心ざし集まれば、いよいよ世の中に、才ありはか
ばかしき人多くなんありける。文人・擬生などいふなること
どもよりうちはじめ、すがすがしう果てたまへれば、ひとへ
に心に入れて、師も弟子もいとどげみしましたまふ。殿にも
文作りしげく、博士、才人どもとこるえたり。すべて何ごと
につけても、道々の人の才のほど現るる世になむありける。

「少女」③三〇頁

夕霧が大学寮へ入学したことで、上中下の身分に関わらず、多くの者が大学での勉強を志して集まってくる。その結果、ますま

す学問を修めたしつかりとした者が多くなったという状況が語られ、かつて大学が栄えていた時代が思い出されるほどに、今また大学寮が栄えることとなった物語世界の状況を説明している。さらに、大学寮が栄えるのみならず、「殿にも文作りしげく」とあるように、源氏の邸で作文の会が頻繁に開催されて、博士や才人などが重用される時勢となったという。ここでいう博士や才人とは、漢才や文才など先に述べた光源氏が重要視した漢才とそれに近いものを持った人材であると推察される。このように、大学寮衰退という学問（漢才）の衰退の状況から大学寮繁栄の時世へと、物語世界の大きな変化が起こっているのである。

そして、この変化を引き起こしたのは光源氏である。夕霧を大学寮へ行かせることで大学寮への関心を高め、大学寮関係者に恩恵を授け、重用したことがこの物語世界の大きな変化をもたらすこととなったのである。夕霧に対する教育観で語った「才をもととし」た世界がここに体现されたわけである。

先に述べたように、権勢を手中に収めた存在として物語の中にある「世」を変える力を持つ光源氏が、ここに現れる。そんな力を持つ人物の考えは、そのまま物語全体の中心となり、理想の物語世界を構築しようとする論者としての意識を実現したような世界を作り上げたのである。光源氏の栄華に対するまなざしというのは、そのまま『源氏物語』の作者が思うところの「世」を実現するまなざしではなかるうか。しかし、それは裏を返せば、作者の思惑通り物語を動かすための布石であったともいえるのではないか。物語の主人公である光源氏に漢才尊重の姿勢を植え付けるといふ布石があつて、その主人公の理想とした世界が物語に実際に構築される。これは意図した物語の構築であり、その意図の思想を支

えるものとして、「凶宅の詩」の受容があるといえる。

さらに、才（漢才）に加えて、光源氏の主張には「大和魂」という言葉があった。「大和魂」という言葉は、『源氏物語』の「少女」の巻が初出とされる。そして、この言葉は、「その漢学による知識を土台として日本の実情に合わせ実務を処理する能力のこと」と注されている（注14）。日本の実情に合わせた政治の実務をこなす能力「大和魂」と、漢学の能力である才を組み合わせることが、光源氏の主張であり、光源氏が理想とする世界を構築する人材の要件であった。

漢と和の融合を光源氏が主張したことに関連して、「梅枝」巻における、光源氏が明石の君の入内の時に送られた書の手本を作る場面などから、光源氏が和と漢を融和させることで新しい文化的営みを試みていくさまを描いているという指摘が、河添房江氏によってなされている。河添氏が「まさしく光源氏は和漢を自在に融和させ使いこなす「文化的覇者」のモデル」（注15）としたことは、「少女」巻に見る光源氏の夕霧に対する教育観、「才（漢才）」と「大和魂」の融合によってできる新しい人材の創造に無関係ではないだろう。むしろ光源氏が「少女」巻で、逆境にあった才という唐めいたものを持ち出してきたことに、河添房江氏が指摘する新しい文化的営みの試みを積極的に見出ししていきたい。もし仮に、この試みが物語内の新たな文化の創造に留まらず、本稿で記した物語世界内の改革にまでも寄与していくことがあれば、これは物語を動かす何かしらの力となったといえよう。漢／和を仕切るのではなく、廃れつつあった唐めいたもの（才）に、和の要素（大和魂）を融合させるといふ『源氏物語』ならではの漢／和に対する考えが、ここから窺い知れるだろう。

このように新しく創造された人材は、ここからの物語では、夕霧をはじめ「才（漢才）」をもととした人物として重用されていく。これは、白詩の「凶宅の詩」における権勢の維持の難さを主張する精神を物語作者が取り込んで出した答えであり、その漢才が光源氏という主人公によって重要視され、物語の構築に寄与したことを示している。すなわち、白詩の「凶宅の詩」における諷論詩の理想性を、物語独自の手法で体现したものであったということができるのではないか。「凶宅の詩」の精神に影響を受けた、物語を通観する光源氏の主張は、そのまま『源氏物語』作者の内に秘めた思いだったのかもしれない。

五、おわりに

ここまで見てきたように、『源氏物語』「少女」巻では夕霧の大学寮入寮の場面が描かれている。当時、大学の入寮が元服の時であったことから、別名である字をつけることが一般的であった（注16）。夕霧もまた字をつける儀式を行っている。さらに、先に引用したように、その儀式の後に光源氏の邸宅で作文の会が開かれた。この作文の会とは、中国の曲水の宴に倣った漢詩文を作る宴の席であった。先に引用した箇所直後を引く。

おぼえ心ことなる博士なりけり。かかる高き家に生まれ給ひて、世界の榮華にのみ戯れたまふべき御身ももちて、窓の螢を睦び、枝の雪を馴らしたまふ志のすぐれたるよしを、よろづの事によそへなずらへて心々に作り集めたる、句ごとにおもしろく、唐土にも持て渡り伝へまほしげなる世の文どもな

りとなむ、そのころ世にめでゆすりける。大臣の御はさらなり、親めきはれなることさへすぐれたるを、涙落として誦じ騒ぎしかど、女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、うたてあれば漏らしつ。」

「少女」③二六頁

この作文の会で詠まれた漢詩は記されていない。「窓の螢を睦び、枝の雪を馴らし」（「少女」③二六頁）とあるように、中国の「螢雪の功」の故事をふまえて、上流貴族でありながら、学問に勤める夕霧を褒め称える内容の漢詩が詠われたであろうことがうかがえるだけである。その漢詩省略については、語り手側から「女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、うたてあれば漏らしつ」という一文で理由が示されている。この一文は従来草子地として解釈されている。

草子地とは、『日本国語大辞典』では、「物語・草紙などの中で、説明のために作者の意見などが、なまのままで述べられている部分。物語・草紙などの中の地の文章。叙述の部分」と説明される。『源氏物語』には、しばしば物語の展開の中で、物語の登場人物とは別に第三者が物語の表面に出て来て、感想や批評めいた発言をしている部分が見れる。これらは『源氏物語』の諸注釈書において「草子地」と呼ばれ、さらには「物語の作者の詞」（『花鳥余情』）「批判の詞」（『孟津抄』）「草子の辞」（『記者の筆』）「細流抄」
「柴式部が詞」（『弄花抄』）「常套的省筆の草子地」（『評釈』）等々の指摘がされてきた。

諸注釈で草子地と指摘されている「女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、うたてあれば漏らしつ」では、この作文の会を見

聞している人物が、ここでは、女であると性別を明かし、女である立場を理由にここで見聞した漢詩文をまねして書くのは憚られて、書き漏らしたと発話している。この見聞した女である語り手は、勿論、女である私という一人称で発話している。このように一人称的言説が源氏物語において表出されている理由について、三谷邦明氏は、「この物語では語り手が実体化されているからである」とし、さらに、詳しく『源氏物語』における一人称的言説と草子地の関係について述べている（注17）。

源氏物語では、光源氏などの登場人物の傍らで、彼らの体験を見聞した語り手（多くの場合は女房。ただし、須磨・明石巻の多くの場合のように、例外はあるが、光源氏の従者＝男性の場合もある）たちが、黒衣になって、その出来事を語り、それに加えて、聞き・批評し・筆録し・校訂している「場」が設定されている。その「場」から発せられる言葉が「草子地」なのだが、「主人公たちの傍らで、彼らの体験を見聞した語り手」という条件が、このような一人称的言説を記入させているのである。黒衣が、その姿を僅かであるが現出させた言説が、草子地と言われている記述なのである。

語り手が実体化されているテキストでは、作家は、語り手という他者の言葉と（対話）を試みることになる。語り手たちの階層・階級・状況・イデオロギーなどといった、さまざまな属性を意識化・対象化する必要が、作家に生まれるのである。

先に挙げた「女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、うたて

あれば漏らしつゝは、作文の会を主人公たちの傍らで、見聞した語り手である黒衣が女と明記されていることで、より一層表出し、実体化している。このテクストを語り手が実体化したものであると捉えた上で、三谷氏が述べる、作家に生まれる語り手へのさまざまな属性の意識化・対象化の必要性を鑑みた時、この語り手に作家はどのような属性を与えているのだろうか。それは、この草子地を文字通りに解釈するだけで十分に窺い知れるだろう。

まず、この語り手に与えられた属性は、先ほどから重複して述べている女という属性である。そして、この語り手は、源氏邸で開かれた作文の会を見聞し、そこで詠まれた博士や才人、源氏が作った漢詩が素晴らしく、中国に持つて行って伝えたいと思えるほどであったと賛美し、女である自分は漢詩を知らないのでまねして書くことは憚られて、不都合なことであるという思いから書き漏らしたとしている。

つまり、この女という語り手は、漢詩文を詠むこと、女性が漢詩に通じているのは不都合であるというイデオロギーを作家によって持たされているのである。これは、作者の持つイデオロギーの一つとも考えることができるだろう。

しかし、『源氏物語』作者は、この女の語り手の存在によって、漢詩文や漢籍は男性の教養であり、女性がそれらに通じることは好ましく思われないうイデオロギーを自覚しながら、『源氏物語』という作品の中で多くの漢籍引用を行っている。これは、「女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、うたてあれば漏らしつゝ」で見た、語り手の女の発話に見られる性質とは明らかに性質を異にする態度であるといえる。

このように、『源氏物語』作者が語り手を形づくる名や性質を、

語彙を以て持たせるだけでなく、その語り手に何らかの社会背景や信念、イデオロギーを付与することは非常に興味深い現象であるといえる。そして、このように作者が語り手に持たせる性格と作者自身の物語全体を通じた創作態度とは、必ずしも同一性を持つわけではなく、相反する姿勢をも持っている場合があるということも注視すべきことであろう。

このような語り手と作者の関係と、先に見た漢詩引用から物語世界の構造に影響を及ぼすような考えを登場人物に持たせ、物語世界を構築していく手法などは、いったいどのように関わり合っているのか。その点は、今後の課題として追究していくつもりである。

注

※『源氏物語』本文は『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠り、巻名・『新全集』巻数・頁数を附した。

(1) 中西進『源氏物語と白楽天』（岩波書店、一九九七年）。

(2) 古沢未知男『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』（桜楓社、一九六四年）。

(3) 藤原克己『源氏物語における〈愛〉と白氏文集』（『源氏物語と漢詩の世界』『白氏文集』を中心に）青簡舎、二〇〇九年）。

(4) 村上哲見『漢詩と日本人』（講談社、一九九七年）。

(5) 日向一雅『雨夜の品定』と諷諭の物語―『白氏文集』『新楽府』の受容と変奏（注3前掲著所収）。

- (6) 『新編日本古典文学全集 一八 枕草子』(小学館、一九九七年)。
- (7) 『新編日本古典文学全集 二六 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』(小学館、一九九四年)。
- (8) 藤原克己「幼な恋と学問—少女卷—」(『源氏物語講座 第三卷 光る君の物語』勉誠社、一九九二年)。(※論文名と書籍名を逆にした)
- (9) 中西進「桐壺」(注1前掲書所収)。
- (10) 丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』(東京女子大学学会、一九六四年)。
- (11) 白居易の詩の引用は、那波本により、佐久節『白楽天全詩集』(日本図書センター、一九七八年)の訓読を参考にして訓読した。
- (12) 新聞一美『源氏物語と白居易の文学』(和泉書院、二〇〇三年)。
- (13) 田中隆昭「夕霧物語の主題」『源氏物語研究集成 第二卷』(風間書房、一九九九年)。
- (14) 『源氏物語注釈五 薄雲—胡蝶』(風間書房、二〇〇四年)。なお、光源氏の大学教育重視の考え方について、『河海抄』『花鳥余情』『岷江入楚』では、『尚書大伝』『三代実録』『論語』『貞観格』を引用して、古来大学教育がいかに重んじられてきたかを注記していること、『貞観格』が「大学は才を尚ぶの処、賢を養ふの地なり。天下の俊成来たり、海内の英並びて萃まる」と注することを日向一雅「光源氏のライフサイクル—行事と儀礼を中心に—」(『源氏物語—その生活と文化—』中央公論美術出版、二〇〇四年)が指摘している。
- (15) 河添房江『唐物の文化史—舶来品からみた日本』(岩波書店、二〇一四年)。
- (16) 『源氏物語注釈五 薄雲—胡蝶』(風間書房、二〇〇四年)では「字つくること」は、元来中国で元服時に実名の他に名前を付けたことに倣い、大学入学の際に字を付けること。」と注記している。
- (17) 三谷邦明「言説分析への架橋—語り手の実体化と草子地あるいは滯標卷の明石君の一人称的言説をめぐって—」(『源氏物語の言説』翰林書房、二〇〇二年)。
- (みうら・よしこ)東京学芸大学大学院修士課程